

伊丹ルーテル教会 聖霊降臨後第七主日礼拝 2020年7月19日

前奏：

招きのことば：イザヤ 44:6-8

イスラエルの王である主 イスラエルを贖う万軍の主は、こう言われる。
わたしは初めであり、終わりである。わたしをおいて神はない。
だれか、わたしに並ぶ者がいるなら 声をあげ、発言し、わたしと競ってみよ。
わたしがとこしえの民とするしを定めた日から 来るべきことにいたるまでを告げてもよ。
恐れるな、おびえるな。既にわたしはあなたに聞かせ 告げてきたではないか。
あなたたちはわたしの証人ではないか。
わたしをおいて神があるか、岩があるか。わたしはそれを知らない。

罪の悔い改めと赦しのことば：

会衆：私たちは生まれつき、自分中心、わがままで、心の中に本当の愛のかけらもありません。
思いとことばと行いで、まことの神を軽んじて、となりびとにも愛のない、神の御前に
罪人です。神様、ほんとうにごめんなさい。私たちは祈ります。私たちを救うため あなた
がお与えくださった イエス・キリストによって、どうかあわれんでください。アーメ
ン。（短い黙祷を持ちましょう）

牧師：何でもおできになる神様は、あなたのすべての罪を赦すために、そのひとり子、イエス・
キリストを十字架の上で死に渡してくださいました。ですから神様の御言葉をとりつぐ
務めに任じられた牧師として、今、あなたがたに宣言 します。父と、御子と、聖霊のお
名前によって、あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。 **アーメン。**

使徒信条

われは、天地のつくり主、父なる全能の神を信ず。

われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりて宿り、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、
十字架につけられ、死して葬られ、

陰府(よみ)にくだり、三日目によみがえり、天に昇り、父なる全能の神の右に座したまえり。
生ける人と死にたる人とを審かんがため、かしこより再びきたりたまわん。

**我は聖霊を信ず、また、聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの
よみがえり、限りなきいのちを信ず。 アーメン。**

祈り

愛とあわれみに満ちておられる私たちの父なる神様、

あなたは私たちのために救い主イエス・キリストをお送りくださり、その死と復活によってわたしたちをあなたの子としてくださいました。あなたに逆らい自分中心に生きることしかできない私たちのすべての罪を赦し、私たちにあなたと共に歩むことを喜ぶ新しいきよい心を与えてくださいます。私たちはまだしばらく、罪に汚れたこの世界で生きていかなければなりません。時には疲れて倒れこみ、時には絶望して立ち上がれない気持ちになります。今朝も私たちを憐れんでください。イエス様のみ言葉によって私たちを赦し、きよめ、強めてください。私たちは今日から始まる新しい一週間を、イエス様のお与えくださる安らぎと、勢いをもって始めます。神様と交わり、人々を大切にするすばらしい一週間にしてください。あらゆる危険やわざわいから私たちをお守りください。

新型コロナウイルスの2次感染拡大の心配を持ちながら、私たちは慎重に新しい生活を立てあげようとしています。今朝もあなたのみ言葉によって私たちを教え、新しい命の息吹で力づけてください。今週も、私たちの遣わされている所で、御名のみ栄のために歩ませてください。この祈りを、私たちの救い主であり主であるイエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 **アーメン。**

使徒書朗読：ローマ8章12-25節

それで、兄弟たち、わたしたちには一つの義務がありますが、それは、肉に従って生きなければならぬという、肉に対する義務ではありません。肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きます。

神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてくださいます。もし子供であれば、相続人もあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。

現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと思われたいです。被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。

わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

福音書朗読：マタイによる福音書 13章 24-30, 36-43 節

イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』

それから、イエスは群衆を後に残して家にお入りになった。すると、弟子たちがそばに寄って来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。イエスはお答えになった。「良い種を蒔く者は人の子、畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである。だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそうなるのだ。人の子は天使たちを遣わし、つまずきとなるものすべてと不法を行う者どもを自分の国から集めさせ、燃え盛る炉の中に投げ込ませるのである。彼らは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。そのとき、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く。耳のある者は聞きなさい。」

讚美歌 249 番

- 1 われつみびとの かしらなれども、主はわがために 生命 (いのち) をすてて、
つきぬいのちを あたえたまえり。
2. あまつみくにの たみとならしめ、幹につらなる 小枝のごとく、
ただ主によりて 活かしたまえり。
3. 妙にもとうとき みいつくしみや、もとめ知らず 過ぎしうちに、
主はまずわれを みとめたまえり。
4. おもえばかかる つみびとわれを さがしもとめて すくいたまいし
主のみめぐみは かぎりなきかな。

説教：「父の国で太陽のように輝く」

私たちの父なる神様と御子イエス・キリストから、恵みと平安が豊かにありますように祈りつつ、御言葉をとりつぎます。

イエス様はたとえを使って天の御国のお話をされました。特にマタイによる福音書 13 章にはいくつかのお話があります。畑に関係するたとえとしては、よい地に落ちてたくさん実を結んだ4つの種のお話や、とても小さなからし種でも地にまけば鳥が来て枝に巣を作るほどの木になるというお話、そして畑にかくされた宝のお話とともに、本日開かれている毒麦のたとえが語られています。

たとえを使ってお話をするのは、ふつうは奥深い真理を、ああなるほど、そういうことか、と理解できるように、わかりやすく説明するために用いられます。けれどもイエス様がお話になるたとえは、真理を明らかにすると同時に、真理を隠す働きをします。天の国の福音を信じる人々には、その奥義がわかります。けれども、聞いても信じない人々にはむしろ天の御国の心がわからぬように隠す働きをします。神様の前に罪びとである私たちのために、神様はイエス様を救い主としてお送りくださったので、罪を悔い改めてイエス様を信じる人が天の御国に迎えられますのですが、神様の前で自分が罪人であることを認めたくない人、イエス様が唯一の救い主でいらっしゃることを無条件で信頼することをためらう人には、イエス様のお話になる天の御国がわかりにくい、遠い存在に思えてしまいます。

ある人がよい種を畑にまきました。収穫を願って、よい実を实らせることを楽しみにしていたのです。しかし、夜のうちに敵である悪魔がその麦畑に毒麦の種をまいて行ってしまいました。イエス様は当時の種まきの現場をよくご存じでした。毒麦の問題は頭を悩ませるものでした。細麦と呼ばれる雑草が麦と一緒に生える問題です。毒麦を食べるとめまい、吐き気、しびれを起こすのです。毒麦は穂が出るまでは麦とうり二つで見分けがつかせません。さらに根が絡みやすく、抜こうとするとよい麦の根がいっしょに抜けてしまうのでした。4つの種のお話の中で出てくる茨の中にまかれた種に少し似ているようですが、これは別のたとえです。よい畑によい麦の種と毒麦の種がまかれてしまいました。実際に農夫を困らせるために、敵意をもって毒麦をまく人がいたようです。どうすればいいのでしょうか。

しもべたちは主人に、私たちが毒麦を抜きましようか、言いました。問題が小さいときに早く決着をつけておきたい。毒麦がそのままよい麦と一緒に自分たちの畑で育ってしまっはいいけない。はやく手入れをしたい。こんな風に思ったのでしょう。とても順当な提案に思えます。しかし主人のこたえはNOでした。借り入れの時まで待つように、そして育った実を見てから、毒麦を見分けて束にして焼くように、そして残ったよい麦を集めて倉に納めるように、と指示をしています。

主人の気持ちはわかりますか。たしかに毒麦はよくないものですが、それを引き抜くときにまちがってよい麦まで引き抜かれてしまうことはもっとよくないことと知っているのです。ではいったいこのたとえにはどんな意味があるのでしょうか。

イエス様は弟子たちにあらためてこのたとえの意味をお話になりました。36節以下に記されています。畑は世界、よい種をまくのは人の子と言われるイエス様、わるい種をまいた敵は悪魔、よい種は御国を受け継ぐクリスチャンたち、毒麦はその中に混じっている悪いものの子たち、そして収穫の刈り入れの時は世の終わりで刈り入れ作業は天使たちがする、ということです。悪い者たちは集められて燃え盛る炉に投げ込まれ、正しい裁きを受けて苦しみのあまり泣き叫ぶこととなります。一方、正しい人々は、まちがった人々のまぎらわしい妨害や巧みな誘惑に躓かないで、忍耐をもってよい実を結び、父なる神様の御国で太陽のように輝くこととなります。イエス様はこのような説明をなさいました。畑のお話は、世の終わりを待つ、私たちのお話だったのです。世の終わりまでは正しいものと不法を行うものがいっしょに存在するというお話だったのです。

この世界は、神様の働きによって罪が赦されて、あたらしい命に生きる私たちとともに、神様を受け入れないで、自分で正しいと思うように生きている人々がいます。私たちはそのように御国の民と不法の民が入り混じって生活する世界に生きています。

イエス様を信じる人には、自分たちの交わりから異質な人を締め出して、できるだけ純粋な信仰を持つ人だけの教会をつくっていきたい、と願いを強く持つ場合があります。成熟した信仰をしっかりと持っている人だけの、霊的な交わりを追求する場合があります。純粋さには大きな魅力があります。ですから多くの人々が現実の教会のいろいろな課題を見て、教会が純粋な信仰をもっている人々だけの集まりになったらどんなにすばらしいことか、と思っても不思議ではありません。けれども待ってください。そのとき、まだよちよち歩きの信仰の人はずいぶん減り、そこにおれなくなってしまうかもしれません。自分たちの正しさが、神様の愛を狭くしてしまうこととなります。

教会を純粋な信仰の人だけの集まりにしたい、という場合、自分たちの集まりの中を純粋にしたい、というだけではなくて、汚れたこの世の生活から離れて、自分たちだけの生活を始めた、という願いに発展することもあります。イエス様を信じていない人々のたくさんいる世の中で、人々のならわしにあわせて、時には妥協を強いられたりしながら、迷いながら、葛藤しながら、生きていくよりも、いっそ、めんどろを避けてクリスチャンだけで成り立つ社会をつくったらどうか、という発想です。しかしまだその時ではありません。イエス様は、私たちが見極めて判断するのではなく、やがて神様のただしい裁きによって不法の人が裁かれ、また正しい人が父の御国で光り輝くときがくる、と言われます。完成のときまで、私たちは忍耐をもって、毒麦とともに育っていくのです。

イエス様のこのお話は、私たちのものの見方を変えてしまう力がありますね。私たちの正義感が変わります。神様の正しさとぬくもりによって、私たちが私たちの持つ正義感を見直すき

かけになります。たしかに、何が正しく、何が間違っているのか、判断することは大切です。当時も、今の教会にも、異端と呼ばれるまちがった教えを信じる人々がいます。また、罪に関して、救いに関して、信仰生活に関して、正しくない理解をしている人々もいます。教えをしっかり学んで毒麦を毒麦として見極めることは大切なことです。しかし、自分が人を裁きながら人を正そうとしたり、さらに人を排除していくことには慎重さが必要です。自分の価値観からよかれと思って純粹さを求めるあまり、信仰が今にもこわれてしまいそうな小さな人のひとりにもあたたかい愛をもって育て養ってくださる神様の愛が忘れられてしまうことはあってはなりません。

また、私たちの絶望が希望に変わります。神様が終わりのときにただしく完成してくださることを知って、今は神様にすべてをゆだねて安心することができ、その神様に期待をよせ信頼して今というときを忍耐をもって歩むことができます。私たちは、世の中の圧倒的な不平等や不条理に向き合って生きていかなければならない現実、神様がいてくださって働いてくださっているのになぜなのか、と問うことにも疲れてしまいます。そして、どうせこの世は不完全だ、神様を信じて何もかわらない、というような絶望感を併せ持って、それと闘いながら信仰生活を送るということもまれなことではありません。けれども、イエス様はやがて収穫の時が来る、正しい裁きがある、そのとき私たちは父の御国で太陽のように輝く、と約束してくださっています。その約束を信じて待ち望むことができるのです。苦しみととまどいの現実でも、神様に信頼して待ち望む幸いがあります。たしかに苦しい、しかし希望がある、というところに立つことができます。

考えてみると、そもそも私たちも罪びとです。イエス様の身代わりの償いによって、罪が赦されている罪びとです。私たちのまわりに生きる罪びとである方々にも、イエス様は私たちに与えてくださる同じ罪の赦しを与えようとしてくださっています。まずはイエス様の赦しにあずかっている良い種であることをもって感謝をしましょう。そこにはよい麦と毒麦の区別があります。毒麦に迎合しません。圧倒されません。そして、イエス様によって罪赦されたよい麦として、毒麦がたくさん育っているところにあって、私たちもよい実を实らせて、神様を敬い、人々を愛し、自分に与えられた使命を心を入れて喜びをもって誠実に果たしていきましょう。罪びとを愛して、ご自分のいのちをお与えくださったイエス様のゆえに、私たちは自分が赦され、あたらしい歩みをさせていただいているのですから、人々を赦し、人々があたらしい歩みができるように全力で支え、時には涙を流して真剣に祈り求めていきましょう。

イエス様のお弟子たちもみな、ある意味では未熟な人々でした。謙遜に見えて、えらくなりたいたい、と野望を持つものもいました。自分の身の危険が迫ったとき、とっさにイエス様を知らない、と見捨てたものもいました。ユダはイエス様を裏切って銀貨で売り渡してしまいました。どこにも純粹さを認めることはできません。しかし、イエス様はそのようなひとりひとりを尊

重し、見捨てず、愛し通してくださいました。彼らの罪のために、十字架につけられたのです。それは彼らの罪の赦しのためでした。前年ながらユダは悔い改めることはありませんでしたが、最後の晩餐までユダを弟子のひとりとして導いてくださいました。私たちはそんなイエス様に導かれて歩んでいます。やがて父の御国で太陽のように輝く私たちには、今から、真実できよらかな輝きと、包み込むぬくもりの温かさが備えられています。この一週間も、ただしく、そして温かく、よい麦として歩んでまいりましょう。

人知をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いを守ってくださいます。アーメン。

讚美歌 526 番 献金 献金感謝の祈り

1. 主よ、我が主よ 愛の主よ 主は我が身の 救い主
 <繰り返し> かくまで主を愛するは 今日 初めの心地して
2. 主は十字架を まず負いて 愛の御手(みて)を のべたもう <繰り返し>
3. 生けるときも 死ぬる日も 声の限り かく歌わん <繰り返し>
4. 玉の冠(かむり) 受くるとき この歌をば 主に献げん <繰り返し> アーメン

主の祈り

天にましますわれらの父よ、願わくはみ名をあがめさせたまえ。みくにを来たらせたまえ。みこころの天になるごとく地にもならせたまえ。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。

頌栄：讚美歌 543 番

主イエスの恵みよ、父の愛よ、御霊の力よ、ああ御栄(みさか)えよ。 **アーメン**

祝福の言葉

仰ぎこいぬがわくは、私たちの主、イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しきお交わりが、御前に集う一同とともに、今日も、この一週間も、いく久しくとこしえまでも、豊かにありますように。 **アーメン**。

後奏